

## 武藏野日曜集会

## 信徳と権威

——マルコ伝1章12～28節——

小池辰雄

1977年9月18日

即刻福音 獣とともに居給う 神国体・天国体 全生涯が帰依また帰依 帰入祈入 信徳 奴隸意志 100%に従う 即人 網を棄て 信徳即権威 これ何事ぞ 聖靈にありて福音せよ

## 【マルコ1・12～28】

<sup>12</sup>斯て御靈ただちにイエスを荒野に逐いやる。<sup>13</sup>荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獸とともに居給う、御使たち之に事えぬ。

<sup>14</sup>ヨハネの囚れし後、イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣伝えて言い給う、<sup>15</sup>『時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

<sup>16</sup>イエス、ガリラヤの海にそいて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網投ちおるを見給う。かれらは漁人なり。<sup>17</sup>イエス言い給う『われに従いきたれ、汝等をして人を漁る者とならしめん』<sup>18</sup>彼ら直ちに網をすてて従えり。<sup>19</sup>少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給う、彼らも舟にありて網を繕いいたり。<sup>20</sup>直ちに呼び給えば、父ゼベダイを雇人とともに舟に遣して従いゆけり。

<sup>21</sup>斯て彼らカペナウムに到る、イエス直ちに安息日に会堂にいりて教え給う。<sup>22</sup>人々その教に驚きえり。それは学者の如くならず、権威ある者のごとく教え給うゆえなり。<sup>23</sup>時にその会堂に穢れし靈に憑かれたる人あり、叫びて言う、<sup>24</sup>『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の関係あらんや、汝は我らを亡さんとて来給う。われは汝の誰なるを知る、神の聖者なり』<sup>25</sup>イエス禁めて言い給う『黙せ、その人を出でよ』<sup>26</sup>穢れし靈、その人を痙攣けさせ、大声をあげて出づ。<sup>27</sup>人々みな驚き相聞いて言う『これ何事ぞ、権威ある新しき教なるかな、穢れし靈すら命すれば従う』<sup>28</sup>ここにイエスの噂あまねくガリラヤの四方に弘りたり。

## ●即刻福音

マルコ伝1章12節からです。一番、福音書の基本のところです。<sup>12</sup>斯て御靈ただちにイエスを荒野に逐いやる。



ここは非常にマルコ伝は簡単に書いてある。いわゆる荒野の試みです。私が『無者キリスト』の第一部「キリストの実存十転」の中に、「受肉」、「受洗」そして第二転として「靈戦」（ユダヤの曠野—キリスト対サタンの一騎打）のところに詳しく書きましたから、今日はそこは省略いたします。これはぜひ読んでください。その次は「伝道」で、「神の国は近づけり」ということも多少書いてあります。

マルコ伝で非常に特色のある言葉がそこに出てている。

### 「斯て御靈ただちにイエスを荒野に逐いやる」

という言葉です。「ユートス」（直ちに）という字なんですが、ルターは何と訳しているかな。「バルト」か。「バルト」でもいいですが、ちょっと弱いですね。日本語の「ただちに」は大変結構な訳です。「即刻」という字がありますね。即刻というのは非常にいい。直ちに。マルコ伝は即刻福音なんです。マルコ伝は、言葉よりも、キリストの行為面、行動、これがほとんど記事の大部分をしめている。マタイ伝は非常に言葉が多いですが、マルコ伝はキリストの行為です。

だから、これまた、「御靈がただちにイエスを荒野に逐いやる」という。「逐いやる」という言葉も訳として結構ですが、「投げやる」ような意味です。御靈がイエスを荒野の中に駆り立ててしまった。イエスは止むにやまれずして出かけて行つた。ということは、その前にヨルダンの洗礼で——キリストはいわゆる洗礼ではない。御靈のバプテスマ、聖靈のバプテスマです——彼は御靈のひと、聖靈の人となつた。

聖靈に戦いを挑んでくるやつはサタンなんです。ヘブライ語で「サーターン」、ギリシャ語では「サタナース」という。もちろんヘブライ語からきたギリシャ語です。紛争を巻き起こすようなものをサタンという。人を分離させるような、そういった悪い靈です。神さまから離そうとする悪い靈がかかつてくるわけです。

### ● 獣とともに居給う

荒野にて四十日の間サタンに試みられ、獣とともに居給う、<sup>13</sup>御使たち之に  
事えぬ。

妙なことが書いてある。

### 「私たちを試みにあわせないでください」

という、あの「試み」と同じ字が書いてある。「ペラスモス」という字です。ところが、イエスは試みられた。試みには二通りあります。神さまからの試みとサタンからの誘惑と両方ある。これはサタンに試みられた。サタンに誘惑された。「ペーラゾメノス」と書いてある。これは「誘惑されつつ四十日の間」という言い方です。

断食ですね。まあ、雨水くらいは飲まれたかも知れませんが、とにかく大変な断食です。これくらいの断食をしたのはインドのカンジーです。日数からいうと、カンジーの方は七十



日でしたかね。一か月以上の断食なんていうのは、普通の人だつたらぶつ倒れてしまう。それで、どうということを試みられたかは、他のマタイ伝、ルカ伝で読んでください。今日はそれは省略します。マルコ伝はただそれだけです。

### 「獣とともに居給う」

という。荒野の獣がやつてきた。どんな獣か知りませんが、狼が来たかも知れない。アッソジのフランチエスコが狼に向かつて、

「兄弟狼よ」

と言つた。キリストはどんなものが来たつて、これはフランチエスコ以上ですか、キリストに食いつきはしない。「兄弟狼よ」と言つたら、狼がなついてしまつた。自然現象でも何でも、フランチエスコには全部、親しいものです。太陽に向かつても、

「兄弟太陽よ」

と。これは本当に神の靈が、神靈が化体かたいしているような人にならなければ、ただ口でそう言つたつてダメです、魂の声でなくては。喉の声ではダメです。声ばつかりではない。その全体の様子がもう狼が食いつかないんです。本当に溶けてしまつた。

日本では第一流の坊さんがそうでしたね。その人を見ると、何かこつちが溶かされてしまう。良寛さんなんかもそういう人です。何と言つても、愛は最大の力なんです。どんなに力んだつて、この愛にはかなわない。ということは、生きとし生けるものはいかに愛に飢えているかということです。本当の愛に、天的な神の愛に、神的な愛にぶつかるというと、それで魂がまいるわけです。魂がまいるということは、本当にそれによつて救われていくこと。

だから、「獣と共にいたもう」というのは、そういうわけです。キリストに、野犬であろうと何であろうと、みんななついてしまう。動物というのは直観的ですから、判断ではないですから、むしろ動物は非常に勘がするとい。本当に愛している愛の人だというと、すぐになつく。猫でも、犬でも。こつちが恐がつたり、この野郎なんて思つていたら、ウ〜ツなんて唸りだす。

「一切の生きとし生けるものは、一番深い生命は、愛によるんだ」

ということは、ゲーテも『エツカーマンとの対話』の中で言つてゐる通りです。

### ●神国体・天国体

これもまた簡単に書いてある。

### <sup>14</sup>ヨハネの囚れし後、

これは洗礼のヨハネです。洗礼のヨハネが囚われたことはマタイ伝に詳しく書いてある。マタイ伝のどこですか。普段、みんなは聖書を読んでいるでしょうね。とにかく、聖書はよく読んでください。マタイ伝14章1～12節までをお読みください、どういうことで



洗礼のヨハネが殺されたかということを知つてください。ヘロデ、ヘロデヤとのことです。殺されたんですけれども。殺される前に、もちろん捕らわれたわけで、獄に入れられた。

洗礼のヨハネがキリストの先駆をしたわけです。そこでいよいよ時が満ちたと。洗礼のヨハネの、福音の露払いは終わったわけだ。そこで、

イエス、ガリラヤに到り、神の福音を宣伝<sup>のべつた</sup>えて言い給う、<sup>15</sup>『時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』

有名な言葉です。しかし、この言葉は実は洗礼のヨハネが既に言つているんです。

「汝ら悔改めよ、天国は近づけり」

という言葉はマタイ伝3章のところにある。マルコ伝は「神の国」と書いてある。マタイ伝では「天国」です。

「時は満ちた」は、直訳すると、「時は満たされた」という言い方です。受身の完了の形です。「カイロス」（時）という言葉は覚えてください。「時」といつてもこれは、

「<sup>しか</sup>然るべき時、正しき時」

なんです。

「然るべき時が満たされた」

と。天的な、天の時だね。啓示的な意味を含んでいるわけです。今までじつと待つていたが、いよいよ新しい段階、新しい次元がここに起きる、迎えられる。それがいよいよ満ちたのであると。

そして、「神の国」（ヘーバシレイヤートゥーテウ）の「バシレイヤー」というのは、「国」といいましても、神の支配し給うところです。神の支配し給う事態が近づいて来た、やつて來た。それが「神の国」です。国というのは政治的な国ではない。英語の「キングダム」なんていう言葉が使つて訳してあります。しかし、それはドイツ語の「ヘルシャフト」「支配しているところ」、神の意志の行ぜられる所、神の意志の実現する所、聖意実現の場所です。そういう時でもあるし、そういう所もある。神の意志が実現する時、またその場所、それが近づいた。

というのは実は、神の意志の実現体がやつて來たということです。神国とか天国とか。神国体、天国体というのはキリスト自身なんだ。神の意志を身に体している。神の意志を身に体して、キリスト自身が天国であります。キリスト自身が神の国なんです。だから、「近づいた」

というのは、キリストがいよいよそこに現れたということは、

「ここに神の国の支配の事態が実現してくるぞ」

と。キリストの言葉も、キリストの行為も、全部これは天国、神国的なんです。神の意志がそこに実現している。

「聖意実現の事態が今や近づいた」



というのと同じことです、キリスト自身に関わる限りですね。

### ●全生涯が帰依また帰依

そういうわけだから、

「カイ ピステュエテ エントー ユーアンゲリオー」

「だから、お前たちは福音の中に信ぜよ」

という言い方をしている。これは三格でいつているんですよ、おもしろいですね。「中へと」ではない。「中に於いて信する」という言い方です。直訳すると、

「福音の中に於いて信ぜよ、信頼せよ」

と。これは決定的な言葉です。

ところで、「悔改める」という言葉を今、言わなくてはいかん。

「メタノエイテ」「汝ら悔改めよ」

という字です。これはいつかも言いましたように、ただ「悔改めよ」という訳し方はうまくない。これは転向です。

「心の向きをえらぶ、転向せよ、心を回<sup>めぐ</sup>らせ、回心せよ」

ということ。ヘブライ語では「クーム」と書いてある。「クーム」という字は、「帰る、そちらに帰り向く」という字です。だから、「帰依せよ」と訳せばいい。

「転向せよ、回心せよ、帰依せよ、帰り向け」

と。もう少し強くいえば、

「帰入せよ、帰り入つて行け」

と。これが結局、「南無」になる。南無は帰依ですか。

「汝ら、南無せよ」

ということです。

「神の支配は近づいたから、汝ら南無して、福音に信ぜよ」

と、こういうことです。

「ユーランゲリオ」という字はもちろん、「喜びのおとずれ、よきおとずれ」

です。

マルチン・ルターは宗教改革をするときに、彼は宗教改革をしようと思ったわけではない。ただ、ローマ教皇の在り方と、その言っていること、また、カトリックの組織やそういうものを、神学的に聖書に基づいて論議したわけです。それをどこまでも学者の的にやつたわけです。ところが、それが自然に宗教改革になる。95箇条を城教会の門扉に掲げた。1517年10月31日、ヴィッテンベルグの城教会の門扉に一葉の大紙片が張り出されました。ラテン語で書いてある。「免罪符」というものを論じたわけです。



「免罪符というものはけしからん」というわけで。あの免罪符というのは、

「ローマ法王の法規に背いた者に対するところの罪を免<sup>ゆる</sup>すためにお金を払え」というのが始める気持だつたんだ。それがとうとう、人間の罪そのものを免すためにお金が必要るという、御利益のお金になつたから、とんでもないというわけで、ルターがこれに反駁<sup>はんぱく</sup>したわけです。

「ローマ法王の免罪符は法王自身の課したる罰を免じ得るに過ぎないものであるのに、越え<sup>え</sup>べからざる限界を越えて、一般に人間の罪の許しを僭<sup>せん</sup>しよう称<sup>しよう</sup>するものであるが故に、ここに明らかに聖書の真理を犯すものである」

というわけで、始まつたわけです。

その九十五箇条の第一条は、

「我らの主にして師なるイエス・キリストが『汝<sup>汝</sup>悔改めをなせ』

これはマタイ伝やマルコ伝のこの言葉です。

と言い給つとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきことを意味し給つ」という言葉です。

「全生涯が帰依また帰依である。南無<sup>また</sup>南無である」

と、こういうことなんです。そうするとはつきり分かるでしょ。だから、「悔改め」という訳がうまくない。ただ

「悪かつた」

と言つて、悔いて改めるというような、いわゆる道徳的な意味ではなくて、もつと積極的な意味で

「常に新たに神に向かえ」ということです。

「人に向いていてもダメだ、自分に向いていてもダメだ。自分を見ても、人を見ててもダメだ。神さまに向ける。常に新たに、絶対界に自分の魂を向ける。全生涯がそうであるべきことを意味している」と、さすがにルターさんはしっかりとまえてしまつた。

### ●帰入祈入

そして、これは何も或る時だけではない。帰依は、限りなく帰依していく。仏教でいえば、「南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経は、限りなく唱えられていけ」というわけだ。素晴らしい言葉です、この「南無」というのは。

我々は、常に新たに帰依していく。それはどうしてできるか。帰依帰入は、祈り入る、祈りがなければダメです。祈りとは、自分を投げ込むことです。何かお願いすることでは



ないですよ。お願いすることは、祈りの後の枝葉に過ぎない。本当の祈りというのは、自分を投げ入れること。

これがみんな分かつていらないんだな、クリスチヤンなんて言つたつて。体裁のいい祈りばかりしている。なるほど、聞いていれば、ごもつともな祈りをしている。違うんですよ、祈りの質が。本当に投げ入れて、いる祈りかどうか。もうそういう祈りだと、聞いていて、グーッとくるです。自分を投げ入れる、そういう祈りでなければ届かない。

キリストなんかは神の懷の中に入つてしまつて、いる。投げ入れもへつたくれもない。懷の中、で祈つて、いるようなひとだ。

いいですか。あなた方も、我々も、本当の境地はもう、懷の中で祈つて、いる。神さまの、キリストの懷の中で。ただ大きな声で祈ることが祈りではない。沈黙で一向差し支えない。小川のせせらぎの如き声で一向差し支えない。問題は、それが本当に投げ入れてあるかどうか、中に入つて、いるかどうか。祈ると直ちにその中に入つてしまふんです、本当の投げ入れは。これも「即」なんです。即刻、即座です。おもしろいね、この「即座」という言葉も。「座」は場所だよ。「刻」は時。漢字の味をよく知つてくださいよ。

みんな漢字をいい加減に、しているから困る。今朝、テレビで

「漢字をだんだんどのよう、に略すか、中国といろいろ協議しなくてはいかん」なんてやつていた。略したつていいだろう。けれども、略し方が元の意味がわからないよう、そんな略し方をされては困る。私は反対だ、そんなことは。

全生涯が帰入また帰入、南無また南無である。そして、その中に入つてしまふ。だけれども、私はルターをもう一つ突き抜けて、言いたいことがある。そいつは最後にしようかな。

## ●信徳

<sup>16</sup>イエス、ガリラヤの海にそいて歩みゆき、シモンと其の兄弟アンデレとが、海に網投<sup>う</sup>ちおるを見給<sup>う</sup>う。

シモンとアンデレ。「シモン」というのは後で「ペテロ」といわれる人です。漁師であつた。かれらは漁人<sup>すなごりびと</sup>なり。<sup>17</sup>イエス言い給う『われに従<sup>すな</sup>ひきたれ、汝等をして人を漁<sup>すな</sup>る者となしめん』

いきなりそんなことを言う。キリストは驚くべきひとですね、ペテロの先の先まで見ている。

「お前たちは漁師で、魚をとつて、いるが、今に人をとるひとになる」と。まだ先の先の話なんだけれども、キリストは将来を予見して、いるわけです。ペテロなんていうのはキリストに躊躇<sup>ち躇</sup>いて、しようがないやつだつたんだけれどもね。

そこで、「従<sup>すな</sup>ひきたれ」と書いてある。直訳すると、「私の後から来い、私について來い」



という意味です。そう言つたら、

はい。ここのこところがまた大事なところです。

「彼らは直ちに網をしてて従つた」

せつかく、漁をしているのにね。

「なにも言わないで直ぐついて来い」

と言つたら、彼らは——やはり「ユートス」です——直ちに網を捨てながら、彼に従つて行きました。この場合の「従う」という字はまた別の字が使つてある。

「どうしてですか？ 今ですか？ 私たちはお魚をとつてているに、なぜですか？」

なんて、いろんなことを聞かない。これが即ち「信徳」なんです。キリストを100%に信じて従つた。<sup>いやいや</sup> 嫌々従つたのではない。信じて従つた。

あの「服徳」という言葉がある。あれは私はあまり好きではない。藤井先生がよく「絶対服徳」ということを仰つたけれども。

「信仰は絶対服徳だ」

と。服徳というと、昔の陸軍はそうなんです。陸軍でも海軍でも、軍人は上官の命令には直ちにこれに服徳する。信徳とは言わない。律法<sup>おきて</sup>としてただ従うのがこの服徳です。

この場合のは律法<sup>おきて</sup>ではない。キリストを信じて、そして従う。「信徳」という言葉はありますよ。即、信徳した。信が直ちに行為に現れた。その行為は、従うという行為です。

今の若い人はなかなかこれをやらない。まず自分が考えてから自由意志によつて行う。必ず考えて自主的に判断してから。みんなそうだね。自主的に判断している。ところが、自らもへつたくれもない。これは僕<sup>しもべ</sup>になつてている。僕の心です。キリストを100%に信じて従うんです。「自主」ではない。「奴隸」なんです。奴隸と言つたつて、これは普通の奴隸ではないですよ、奴隸という言葉を使うけれども。

「信じて従つて自分の意志を棄ててている」

ことを、ただ「僕」とか「奴隸」とか言つてているだけの話です。

### ● 奴隸意志

マルチン・ルターが

「自由意志ではない。奴隸意志だ」

と言つたのは、そのことなんです。エラスムスが「自由意志論」を言つた。エラスムスの自由意志論は、道徳哲学の世界では、それはそれで真理です。けれども、宗教の世界になつたらば、その「自由意志」ではダメなんです。宗教の世界では、もはや人間は本当の自由を失つてゐるから。みんな我執でしうが。我執に囚われてゐる。それを「罪」というんです。全ての人は罪ひとであるというのは、全ての人は我執人であるということです。



己にとらわれているんだから、万人は罪びとなんです。

「全ての人々はこれ罪びとである」

という。ただ一人の例外者がいた。キリストだけ。詩篇の14篇にも、

「神を求める者がない。すべての者は悪をなしている。善をなすもの一人だになし」

という。あれがみんな我執なんです。我執に囚われているから、表向き善のように見えたつて、本当の善ではない。

親鸞が言っている「無義の義」ということは——あの場合の義は、こちらが殊更に何か企てて意識してやるのを義という——そういうものが無くなってしまった。これから抜けてしまっているのが僕の姿です。だから、相手を信じることは、相手を然りとすることは、自分を否<sup>いな</sup>とするということです。

「神さまを然り<sup>しか</sup>」

とするときは、

「自分に対しては否<sup>いな</sup>」

と言っている。

「自分をゼロにしている。神を100%に、無限大にしている」

これが信徳の姿なんです。

だから、ヤコブに言わせれば、シモンとアンデレは、

「その行為によつて義とされる」と言うでしょ。パウロにいわせれば、  
「その信仰によつて義とされる」と言うでしょ。同じことなんです。これは信行、一如になつてゐるから。信即行の世界です。

信が本当の信であれば、行ならざるを得ない。にもかかわらず、人間はダメだから、行が伴わないようなことがしばしばある。

「信仰によつて義とされる」

ということは、どこまでも行為は考へませんよ。

「もう、私はダメなんだ。行為面ではもうゼロで、ダメな者なんだ。躊躇<sup>踟躇</sup>してしようがないんだ」

と。それでも、「信仰によつて義とされる」ということは真理なんです。

「行為が伴つたからその信仰は本ものである」

と、逆にそうは言えない。信仰が本ものならば、行為は伴うことが自然であるが、そうでない場合もある。だけれども、この信が本ものであるとは、どうして本ものなんですか。聖靈が来なければ本ものにならない。

「本当の信仰とは、かくかくの如きものである」



と、マルチン・ルターが『ロマ書序文』のところで書いたあの言葉は素晴らしい言葉です。時々、私は書いているはずですが。

### ● 100%に従う

そういう信徳です。ところが、これが本当の男らしさでもあり、女らしさでもある。大体、信徳の最たるものはキリストであつたんです。キリストは

「私は何もできません。何も言えません」

と言つてゐるではないですか。

「私は父なる神に一切、その言いなりになつて、動いています。その言いなりになつてやつていています」

と。キリストは信徳の極致なんです。それは自分を本当に棄ててかかつてゐる。我執が全然ない。これが本当の男らしさであるとともに、これは本当の女らしさでもある。これは本当の人間らしさというんだ。本当の人間というのはどういうのかというと、神さまに対して100%に従つてゐるひと。いいですか。それが信徳です。

だから、キリストというひとは人が見えるからね、

「このペテロという奴はなかなか躊躇する奴だが、しかし、これは率直に向かつてくる

奴だ」

と。それで、直ちにペテロを捕まえて、見てゐる。キリストは人の本質がすぐ見えるひとですから。そうしたら、その通り、直ちに従つてしまつた。

### 「豚に真珠を与えるな」

なんてキリストが言われたが、福音というものを、何でもかんでも人に伝えようとしたつて、それはダメだよ。或る時は、誰にでも言つたらい。けれども、これに躊躇する者や、いろんな人がある。けれども、

「これを本当に福音の中に入れてやりたいなあ」と思う人は、わかるんです。ところが、案外——

「あの野郎は頑固でしょがないな」

なんていう非常に頑固なやつは——その頑固がひっくり返ると、また凄いことになる。パウロがそうなんです。キリストはパウロの頑固なきは分かつてゐる。けれども、あれがひっくり返つたら凄いことになるということも見てゐる。だから、

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか！」

とやつつけたんです。

### ● 即人

この「直ちに」ということ。



「まあ、明日にしましよう。一か月後にしましよう。来年にしましよう」  
ではないですよ。

「今此處において」

というのが、この直ちにということです。これが即座即刻ということ。

何でも思いついたらすぐ行動に移す。事業家の特色もそういうところがある。「時刻」というね、刻限をつかむことが敏びんなんです。カイロスをグッとつかむ。それをぐずぐずして、ああだこうだと思案している人は結局、自分で運命をふさいでいく。展開しない。人生は、ある意味において、性格劇ですかね、運命劇ではない。その人の性格がその人の運命を自分で結局、つくっていく。常に自己を乗り越えていかなければいかん。自己に執着しているうちはダメ。これは人生の気合だね。私なんか、どつちかというと思案型なんだよな。だから、過去においては、随分マイナスをくつた。直ちにがなかなかできない。しかし、御靈がきたら、大分違ってきた。

キリスト自身が正にこの「直ちに」の人である。

「神に直ちに」

の人である。「即人」（即座即刻、神に直ちにの人）なんだ。即人なんていう言葉はないけれども、今新しく出来た。これも直ちに出来てしまつた（笑）。即人とならなくてはいかん。困るね、新しい言葉をつくつて。私は即人なりというわけです。

### ●網を棄てて

網を棄てて進んで行つてしまつた。

「人を漁る者とは何だらう」

と、はじめは思つたでしょうね。まあ、しかし、これは課題だよな。

<sup>19</sup> 少し進みゆきて、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとを見給う、彼らも舟にありて網を繕いいたり。

私もガリラヤ湖畔に行つた時に、正に網を繕つていた漁師がいた。ビニールの網だつたけれども、その切れ端を少しもらつてきた。

<sup>20</sup> 直ちに呼び給えば、父ゼベダイを雇人ともに舟に遣して従いゆけり。  
お父さんに

「どうです、こうです」

なんて、わけも言わぬで従つて行つた。

日曜日に、

「今日は誰々がやつて來たから行けません。こういうお義理があるから行けません」

なんて、いろんなことで集会に來ない人がある。あなた方、日曜日は「安息日」なんて言つたつて、これは戦いの日なんです。女の方はどうもそれで負けてしまうんだよな。女の



方でも負けないようになつてもらいたい。

「日曜は、私はキリストに会う時なんです。集会で靈なるキリストにお目にかかりに行くのに、お前たちになんか会つてはいられるか」

なんていうわけで、それで集会に出てくるような魂にならなくては。

「この世の仕事が忙し過ぎるから」

とか、

「先生の所は遠方すぎるから」

とか、そういうことを言つてはいるうちは、まだダメだよ。

今度の幕屋の記念日には、私は宣言するから。そういうのはもう、集会から出でてもらう。私は自分のことを言いたくはないけれども、とにかく何十年間、日曜を私は戦つて來たんです、正直。その戦いを共にしないような方々と私はやるわけにいかんですよ。

集会で、キリストに会えば、キリストの中に入れば、聖書を食らえば、もの凄い力が来るではないですか。六日間、突つ走れますよ。ただここでもつてボヤボヤしているために来ているのではないんだから。しかし、そういう集会は、日本にいくつあるか知らんよ。おざなりの習慣的な、ただ気分的な礼拝がたくさんあるでしょうね。祈祷書なんて出来上がつてみたり。

無教会には、人間的な或る意氣込みはありました。けれども、それはまだ人間的です。聖靈の世界ではない。いわゆる

「信仰の英雄」

というような、そういうヒアローシップはダメだよ。いわゆる「信仰の英雄」ではない。もうひとつ御靈の世界は上なんです。

そこで、ヨハネとヤコブとシモン（ペテロ）。キリストに最初に捕まえられたこの三人が、キリストの直弟子として、キリストの十字架に到るまで、躓いたり転んだりしたけれども、とにかく従つて行つた。そして、最後にはみんな躓いた。けれども、聖靈が來たならば、これが本当に三本柱になつた。それから後からパウロが出てきて、四本柱になつたけれども。彼らは即人的な弟子です。この三人は即人たる弟子であつた。世の中は、数ではないですよ。本ものになるかどうか、それだけです。<sup>ひと</sup>他人の問題じやない。あなた方一人ひとり、自分の問題です。自分が本ものになればいい。福音の世界で本ものになる。文化文明なんて言つてはいるうちダメだよ、もう一つ奥の世界に入らなくては。

## ●信徳即権威

<sup>21</sup>斯て彼らカペナウムに到る

カペナウムというのは北の方です。ここはシナゴーグの昔の跡があつて、非常に大事な所です。



イエス直ちに安息日に会堂にいりて教え給う。  
ここにも「直ちに」とある。

<sup>22</sup>人々その教<sup>おしえ</sup>に驚きあえり。それは学者の如くならず、権威ある者の「ごとく」

教え給うゆえなり。

「権威ある者の「ごとく」という訳し方もできるでしようけれども、  
「権威ある者らしく」

と言つた方がいい。「のよう」ではない。「らしい」んです。「らしい」という言葉はそういう意味に使うでしょ。学生は学生らしく、女は女らしく、男は男らしくと。

「権威ある者らしく教え給う故なり」

ということです。「権威」という字は「エクスーシア」という字で、  
「十全なる力を持つてゐる」

という意味です。もちろん、この権威は神的権威です。人間の権威ではない。神的権威は、聖靈がなければ来ない。

いいですか。なぜ、私は今日、題に「信徳と権威」と書いたかというと、神さまという「オーソリティ」そのもの、「エクスーシア」そのものであるところの神さまに、100%に「はいっ」と言つて信じ従つてゐる、そういう人に権威が来る。信徳即権威なんです。直ちに権威がくる。信徳、神・キリストに対するところの100%の平伏しの魂、「はいっ」と言つてそれに平伏す魂に、本当の権威がくるんです。

「私はひとつ考えよう。自主的に判断しよう」

なんて言うところには、ひとつも本当の権威はこない。男の人でも女の人でも、老いたるも若きも、本当にその世界に入れば、自ずから権威が備わつてくる。何も恐いものがないです、この権威が入つてきたら。

私なんかは昔は弱虫で、少し偉そうな人が来ると、なにかこつちがおびえるような気持があつた。今は全然、そんなものはありはしない。人間的な相対的な敬意はもちろん払いますよ。なにも威張りくさることはない。そういうことと本当の権威があるということは全然、次元がちがつたはなしです。そうすると、

「なんか、あれは謙遜な人なんだが、なんかちよつとどうにもならん（権威のある人だな」

なんていうことになるです、女の方でも。

「いざ、右せんか、左せんか」

という、究極の真理のことになつたら、もう

「ナイン（否）！」

と言つてることができる。

マルチン・ルターがその当時のローマ法王や、カルル五世に対して、「<sup>いな</sup>否！」と答えた。



自分の書いたものを取り消せと言われたら、

「私は聖書と聖書の真理によつて反駁されるのでなかつたならば、私はこれを取り消すわけにいかない」

と。彼らに對して「ナイン（否）！」と言つた。神に對しては「然り」と言つた。ルターは神に對して「然り」と言つたのは、自分はそれに本当に信徳しているから、権威を持つてしまつたからです。

だから、学者の如く、學者的良心で、

「こうでもあろう」

だと、

「私はそう思う」

だと、そういう言い方はしない。権威の世界は、

「こうである」

と断定するんです。「あろう」なんて言つてゐるのではない。必ずそくなつていく。現象はそうならなくとも、根源の現実ではそくなつていく。

讃美歌で、「うならん」とか書いてあると、気がぬけてしまう。私はそう歌わないんだ、もうひとつ奥を歌う。

「イエス、聞きたまわん」

なんては、

「聞きたもう」

と歌わなくてはダメです。「たまわん」ではない。「たもうであろう」だけ余計なんだ。そういう魂にならなかつたら、力は来ないですよ。相対的な世界の判断で、

「こうでもあろう。ああでもあろう。こうなると思う」

なんて、権威のない世界はそういう世界です。

「それでは、お前は独断ではないか」

と。そうではない。いわゆる独断で言つてゐるのとは違うんです。そこが分からない人は、すぐ「独断だ」なんて言う。

皆さん、いいですか、身体の調子が悪かつたり、あるいは他の事のいろんな問題があつたり、そんなことに左右されてはいかんですよ。もう一つ奥の世界に入つてください。キリストの力、御靈の力がくる。

「我は門なり」

という。十字架を通つて聖靈の世界に入つて「うらんなさい。それはもう……、私は異言が出來うになつて困る。

だから、断定している。ヒルティーも聖靈の人です。ですから、彼は「うであろう」なんという言い方はあまりしない。実に、てきぱきとものを言つてゐる。ケーベルさんが



「本当にヒルティーは確信をもつて言つてゐる」と言つた。

確信というのは、主観的な確信ではない。ヒルティーはもう実によく聖書を読んでいますからね。聖書が化体しているから。私が今度、書いた『百世の師ヒルティー』（小池辰雄著作集第五巻）はよく読んでくださいよ。特に私は教育者たちに読んでもらいたいと思つてゐる。文部大臣にも読んでもらいたい。

「学者」という字は「グラマテウス」という字で、「グラマー」という字からくる。「文法」は「文字」という字です。文字に拘泥する者たちを「グラマテウス」という。

「グラマテウス（学者）の如くならず、エクスーシア（権威）を持つてゐる人らしく」ということ。

### 「儀文は殺し、靈は生かす」

とパウロが言つた、その儀文的な文字にただ詮索ばかりしてゐる連中が、このグラマテウスという人です。

そういうように自分で権威を持とうなんて思わなくたつて、自ずからそういうことになつていく、本当に平伏してゐる人は。だから、傲慢ではないですよ。権威あることと、何か驕り高ぶつてゐることとは違う。謙虚な人に本当のオーソリティーがくる。これはキリストがそうであつた。信徳と権威をそのまま身をもつて証した最大な人間はキリストである。

### 「我は何事もなしあたわず」

とキリストは言つてゐるではないですか。

「私は何もできない。神さま！」

と言つて呼びかかつて、神の力をいただいて、信徳していたらば、一切のことが出来た。今日の後半の方に出てくるところの、直ちにキリストの権威ある業が現れてゐる。これはみんな権威ある業です。

### ●これ何事ぞ

<sup>23</sup>時にその会堂に穢れし靈に憑かれたる人あり、叫びて言う、<sup>24</sup>『ナザレのイエスよ、我らは汝と何の関係あらんや、汝は我らを亡さんとて来給う。われは汝の誰なるを知る、神の聖者なり』

穢れし靈に憑かれたる奴がそういうことを言つた。これは悪靈でも、靈の世界は靈が分かるからね。こつち（悪靈）は黒い。こつち（キリスト）は白く光つてゐる。白光の靈だ。けれども、靈の世界だから、相手が神の人、神の聖者であることが見えるんです。普通の人は見えない。キリストは——

「ナザレのイエスは、なんだ、少しこの頃、変わつたことを言つたりしたりしてゐるな」なんて——ナザレ人には躓かれた。それで、ナザレにはキリストは御免こうむつて、

「預言者は故郷にいれられず」



と言つて、カペナウムの方に来てしまつた。ところが、カペナウムの会堂にいた悪鬼に、穢けがれた靈に憑かれた奴が、

「これは大変な人だ」

と、それを暴露してしまつた。キリストは、「今は私を現すな」と言つたのに。

<sup>25</sup>イエス禁いましめて言い給う『黙せ、その人を出でよ』

「今、私を神の子、神の聖者だなんて言わわれては伝道の妨げになるから」と。「何の関係あらん」と。それはそだよ。惡の世界と善の世界と、善玉と惡玉とは関係がない。

「私たちを亡ぼそうとやつて來たな」

と。それはそうですよ。キリストはサタンをやつつけるんだから。サタンに舐なめられてしまつたら大変だ。あなた方は、惡靈がいるから、そんなのに舐められてはいかんですよ。罪は、邪よこしまな心を持った者——権謀術数したり、策略をもちいたり——こういう奴が一番地獄のどん底に行く。ただ情感的に間違つたりなんとかはまだ軽いんです。意志的な間違つたのが一番罪が重い。キリストを裏切つたり、謀反むほんしたり、神を裏切つたり。これはサタンです。これはみんな地獄行き。ダンテがそのように罪の分類をやつてあるけれども。

<sup>25</sup>イエス禁いましめて言い給う『黙せ、その人を出でよ』

靈出しというやつです。私も昔やりましたよ、これを。

<sup>26</sup>穢ひきつれし靈、その人を痙攣ひきつけさせ、大声をあげて出づ。

こういうようなことは、病理学的にいうと、そういうようなことを医者は言わないでしょう、医学の世界では。

「これは精神的に異常な人間だ」

と。ところが、医者にはそういう靈の事態が分かつていない。これは本当に靈が出されてしまつた。そうしたらば、痙攣ひきつけさせ、大声をあげて出ていつてしまつた。

<sup>27</sup>人々みな驚き相あい聞いて言う『これ何事ぞ、權威ある新しき教なるかな、穢ひろまれし靈すら命ずれば従う』<sup>28</sup>ここにイエスの噂うわさあまねくガリラヤの四方に弘ひろまりたり。

これから後も、いくらでもキリストが御靈の權威をもつてなさつたことが、マルコ伝には次から次へと書いてある。

皆さんも、本当に聖靈の世界に入つたら、その權威があるんですよ。相手の人を救つてあげようと思つたり、病を癒してあげようと思つたら、本当に御靈に感じたら、それをやらなくてはいかんです。

「私は、まだそれはダメです」

なんて、いつまで言つているか。

壯年の諸君なんかは大いにやつてもらいたいんだ、僕は。もう、今度の25日を限りに、



壮年の諸君はみんな伝道に独立してもらおうかな。まあ、それは、すぐ私は直ちにそういうことを言うから、躊躇いたら困るですよ。もう10何年も一緒にやっているんですから、もつたないですよ、壮年の諸君が活動してくれなければ。御靈の権威が、私たちは福音を受けたらば、本当にその角度がくれば、できるんです。

I君みたいな——ああいう身体障害者でしょ——その人が本当に御靈の権威をいただいたから、どうですか、あのような伝道をしている。私はI君には頭が下がるよ。

この福音はいい加減な福音じやない。もう「キリスト」と言うならば、本当にキリストがさびついているような人になりたいです。

### ●聖靈にありて福音せよ

そこで私は最後に、さつきとり残しておいたと言つたのは、

「天国は近づいた。時は満ちた。汝ら、南無して福音を信ぜよ」

とは、

「汝ら、聖靈に在りて福音せよ」

と。そういう言葉に私は変えたい。変えたいということは更に展開したいわけです。

「神の国は近づいた」

ではない。

「神の国は汝らのうちに在り」

です。我々はこの福音を聴いたらば、

「我々の中に神の国は入っているではないか」

というわけです。

「お前たちは悔改めて」

ではない。

「お前たちは聖靈に在りて」

聖靈に在るからこそ、また本当に南無が言えるんですけれども、

「聖靈にありて福音せよ」

だ、今度は。「信ぜよ」ではない。「聖靈に在りて福音せよ」ということです。

生活において、どういう人にでつくわしても、何か機会があれば、その人を福音の世界に導くのが、それが伝道なんです。何も集会をしなくていい。Mさんは会社でもつて社員に福音しているではないですか。どこにおきましても福音するということは、その人を通してのつべきならない現れ方があるわけです。何も人まねの必要はない。

「聖靈に在りて福音せよ!」

ということです。

それを、普段は、そつちはもう全然やらないで、ただ聖書を読んでただ日曜日に来ている、



ということでは、いつまでたっても始まらない。そういうものではないということです、  
「**我は安息日の主たるなり**」  
とキリストが言わされたのは。

何も私はあなた方を責めるのではない。いよいよそういう角度で行きましょう。そうすれば、日曜日にいらっしゃっても結構ですよ、もちろん。ただ、私の気合は分かつてもらいたい。気合がないというのでもない。私はとにかく言うことが乱暴で申し訳ないですけれども。善意をもつて私は言っているつもりです。だから、

「神の国は既に我々の間に来ているから、中に来ているから、聖霊に在つて福音しようではないか」

と。『ハレルヤ』誌なんて、いくらでも余っています。お金なんかいりませんから、持つて置いてください。そして、カバンの中でも入れておいてどこでも、

「ああ、この人にひとつ読ませてやろう」

と思つたら、やつてください。それがどんなに無駄なことであつてもいいんです。何がどういうようにして働くかわからん。それが本当の協力というんです。I君の雑誌も余っています。どうぞ、使つてください。

なにか、人間というものは、ひとつずつ魂の打ち込み、意気込みというものがなかつたら、これは福音を受けている事態ではなくなつてしまふ。とにかく、私みたいな野郎を使って、神さまは今まで何十年とやつてください。そして、不思議なことも、もう数えきれないほど起きている。これは無教会とは違うんです。私の無教会の昔の友だちが、

「小池はちょっと変わった」

と言つたが、

「お前たちとは本当に違うんだぞ」

と、権威をもつて言えるんです。それは、

「私はこの福音の世界に、使徒たちのこの次元が慕わしくてしようがないから限りなく進もう」

と、やつてゐるわけです。私はぶつ倒れるまでやるから。

ことに若い学生諸君がこの世界に入つたら、えらいことになつてくるよ。それはもう、勉強でも何でももの凄い力が出てくるから。そういう福音を全くとりちがえて、私がD大学で教えている「ドイツの宗教」の時間の百人くらいの学生でも、本当に聴いているやつは前列の何人だか知らん。私は正直もういい加減、学校が嫌になつたね。

しかし、私の気持はお分かりくださいたと 思います。最後に言つた、

「神の国は我らの中にあり、我ら聖霊に在つて福音せん！」

という、その新しい神さまの御靈の啓示をしつかり受けとつてください。おわります。

